'90 10月号 No. 456

京交山岳部報

今月のテーマ ≪秋を求めて≫

〔第１８０８回例会〕★

黒滝山（大谷山）
488.5m －国境シリーズ－

日　時　１０月７日（日）AM７：３０
　　壬生局前出発

コース　京都＝舞鶴＝大山…黒滝山（△４８８.５ｍ）…大山＝水ケ浦…正面崎（府県境東端の岬）…水ケ浦＝舞鶴＝八津合町＝山家＝須知＝京都

担当者　岡田　茂久（256－6504 京都高速ＫＫ）

申　込　１０月５日〆切り

地　図　青葉山　１／2.5万

〔第１８０９回例会〕★

青　山　高　原

月　日　平成２年１０月１０日（水）祝日

集合場所　近鉄京都駅八条口改札前

時　間　午前７時３０分　（７時４５分発　橿原神宮行き急行乗車）

コース　近鉄京都駅→八木駅（乗り換え）西青山駅→青山高原→　（もとどり）山△７５６ｍ→丸山高原→東青山駅→八木駅（乗り換え）→近鉄京都駅

備　考　ススキの揺れる素晴らしい景色の広大な高原です。ファミリーで参加して下さい。

費　用　約2,５００円（往復運賃）

〔第１８１０回例会〕★★★

奥越　経　ケ　岳

日　時　１０月１３日（土）
　　６日（金）夜出発予定

集　合　壬生ＰＭ９：００

コース　東ＩＣ－福井北ＩＣ－勝山市…経ケ岳△1,６２５ｍ

担当者　大槻　雅弘（☎544）

備　考　前夜発でスキー場でテントを張ります。担当者へ連絡のこと。

〔第１８１１回例会〕★★　大峰

山　上　ケ　岳

日　時　10月12日（金）～14日（日）

集　合　九条車庫　ＰＭ８：００

コース　京都－下市口－川合－洞川…山上ケ岳…往路下山

担当者　高速　大倉寛治郎（☎3371）

備　考　マイカー山行のため担当者まで申し込んで下さい。

〔第１８１２回例会〕★★★

若丸山（越美国境）
1,2 8 5.7 m

日　時　　１０月２０日（土）～２１日（日）
　　（20日）PM14:00 壬生局前出発

コース　　京都＝福井ＩＣ＝大野＝麻那姫湖＝温見（熊河川出合）幕営＝熊河川林道終点…熊河川…若丸山（△1,2 8 5.7 m）…熊河川林道終点往路帰京

担当者　　岡田　茂久（256－6504 京都高速ＫＫ）

装　備　　幕営、沢登り、薮漕ぎ用具
　　詳細は担当まで

申　込　　１０月１５日〆切り

地　図　　冠山　１／2.5万

今月の集会

日　時　　１０月１１日（木）PM6：３０
場　所　　厚生会館４Ｆ大教室

企画運営委員会

日　時　　１０月２２日（月）PM6：３０
場　所　　厚生会館４Ｆ大教室

山声雪語

ねんりんピック '90

岡　田　茂　久

”ねんりんピック”がこの９月２９日から１０月２日にかけて滋賀県で開催される。

正式の名は”ねんりんピック　'９０　第３回全国健康福祉祭びわこ大会”という。

趣意として「すべての人々が豊かで明るく、生き生きと生活できる理念の長寿社会づくりをねらいとして展開する。世代間や人々のコミュニケーションを基本理念として、文化イベントや健康イベント等を通じて、ふれあいを演出、提供し、理想の長寿社会づくりへの国民の賛同と参加を得ようとするものである」とあり、主テーマは「輝く長寿　あなたとともに」である。

出場資格を６０才以上として、厚生省が音頭をとり兵庫県、大分県に次ぎ、今年滋賀県で第３回目として開催されるもので、希望の府県が国体と同様に持ち回りで開催することになっている。歴史も浅く競技種目こそ国体に比べて少ないが、参加者数は延べ１０万人に至るというから、その規模はまさに驚異的で、シルバーパワーの面目躍如というところである。もっとも競技種目としてはいずれも危険性の少ない１５種のスポーツが選ばれ、ゲートボール、ペタンク、三世代交流マラソンが変わったところで、囲碁、将棋まである。

選ばれたスポーツ競技の中に、中高年の登山ブームを反映してか登山が選ばれている。北比良峠を中心としてＡ、Ｂ、Ｃの３コースで競技が行われるが、一番心配されるのは事故である。コース

整備等も入念に実施されていると聞くが、しかし事故というものはこんな処でと思う場所や状況で往々にして発生する。まして高年齢者が対象である。その為参加申込書には入念な健康調査書と、家族共署名の誓約書の提出が義務づけられ、競技方法としては「チーム行動とし、地図とコンパスを使い定められたコースを走らずに移動しながら、途中に設けてあるポストの課題を処理しゴールする」。そのほか大会規定に、強制的な休憩、定められた時間内にゴールすれば満点等のいろいろの対策がとられている。いかに立派な趣意を持っても、壮大なイベントであっても、事故を起こしてしまっては大きな汚点を残してしまうことになる。かって京都国体の競技運営に携わったものとして、関係者のご努力と心痛は大変なものであろうことは想像にかたくない。万全の対策はとられているものと思うが、どうか事故の無いよう終了することを心から願うものである。

そして単に「シルバーパワーの祭典」に終わることなく、趣意にあるように世代間のふれあいの場としても、きたるべき高齢化社会のあるべき姿を指針してほしいものである。

登山競技には、我が京交山岳部から、奥村弘信、横井襄二の両ＯＢが京都府代表として出場されている。健闘を祈る。私ももちろんギャラリーとして応援にでかけるつもりだ。

〔第１８０３回例会〕

上州　赤谷川支流「笹穴沢」

梅津　吉田　武

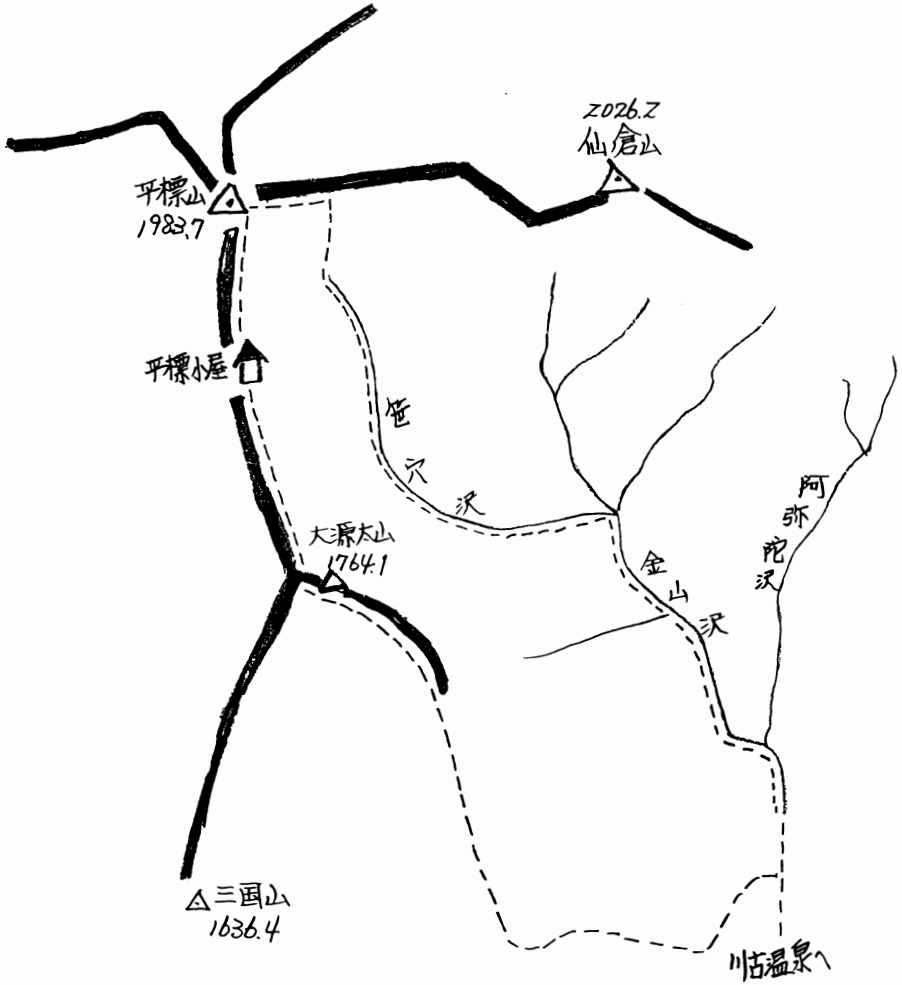
笛吹川、東沢。巻機山、割引沢。平ケ岳、恋ノ岐川と毎年８月に沢登りに行っている。

昨年は僕が国体の為に行かなかったが、今年は大望の谷川連峰をめぐる沢の中で比較的我々にも登れる沢を選んだ。平標山と仙ノ倉山との鞍部に水源を持つ「笹穴沢」に行く事にした。アプローチは少し長いが源流から稜線までが短かくそして歩きやすい草原で、下山路も短かく日帰り行程の山である。

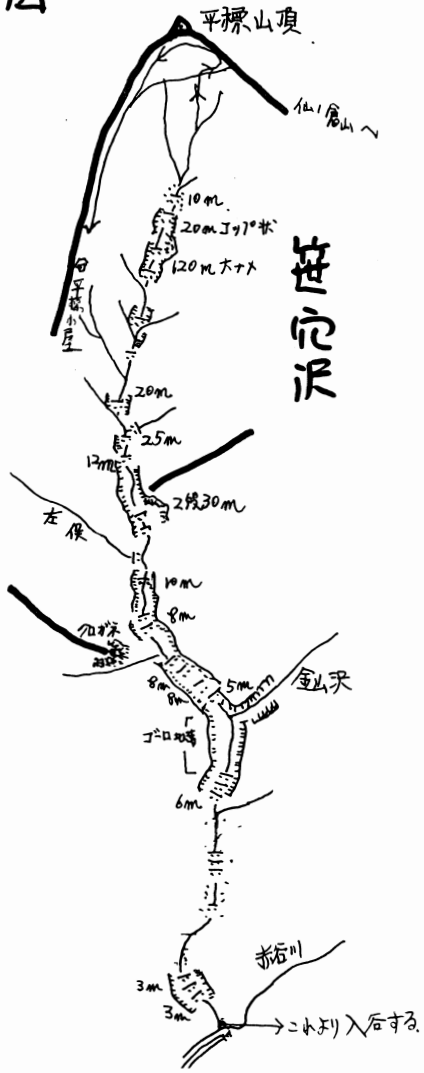
赤谷林道と渋沢林道の合流点に車を置く。赤谷林道を３０分も歩くと林道もなくなり沢におりる。直ぐにフェルト靴をはいて金山沢に入谷した。

笹穴沢の出合まではゴーロの続く谷を流れに沿って徒歩する。２時間弱で笹穴沢出合につく。出合からはすぐゴルジュが始まり、５ｍから６ｍの滝をいくつか越え、所々にナメもあって快適に歩く。しばらく行くと前方右岸に高さ２００ｍ位の「クロガネ」と呼ばれる岩峰が見えて来る。この辺より８ｍ位の滝が３ケ所続く。そして左より支流が入り前方に２段３０ｍの滝が落ちている。大槻さんがトップで左岸を登る。黒く光った滝でいかにも滑りそうであるので一ケ所だけビレーをとってもらう。全員がプルージックをフィクスロープにとり登ってもらう。２段目の滝は右岸を快適に登る。続いて階段状になった滝と１０ｍ位の滝の間で昼食のソーメンを食べる。昼食をすませてすぐ１０ｍの滝を右岸より登る。しばらくはきれいなナメが続く・・・　次に１５ｍの滝は右岸の階段状を登る、そして次の２０ｍの滝は右岸の草付のフェースを登るが上部で落石のしそうないやらしい滝である。岡本君のリードで全員が完登する。しばらくの間はナメの連続で気分良く足を水につけて歩く、次に出て来た滝は階段状の登りやすそうな滝で右岸を快適に登る。

笹穴沢概況図（田村）



笹穴沢遡行図



前方に稜線も見える頃に三段１２０ｍの大ナメ滝が迎えてくれた。下段は草付きの所を各自が登ったが、青草の上に来るとよく滑るので、枯草と乾いた石の上を登るようにする。少しスリルのある快適なクライミングであった。上段は斜面もゆるやかになっていたので左岸の張り出した岩壁の基部をへつりぐんぐん登った。又・・・しばらくはナメの岩床を登ると、２０ｍのコップ状になった滝である。右側の草付を岡本君のリードで全員がクリアーする。水量も少なくなって来たころ最後の１０ｍ位ある滝につく、右岸のルンゼを登り熊笹をつかみながら夢中で登るとゆるやかな流れとなり忠実にたどると草原に出た。

ガスも出てきているので眺望は悪いがなんとかトラバース道に出た。予定していた仙ノ倉山えは行くのをやめて平標山三角点を通って平標小屋で泊るつもりで平標山三角点に行った。１５分位で三角点についた、我々６名だけのバンザイを済ませて早々に頂上を後にする。２０分程下った所に小屋があった、小屋の人に下山道を聞くと巾２ｍ位道は刈払らわれているので３時間もあれば渋沢の出合につくと言われたので小屋で泊ってほそぼそと食事するよりも車に食糧や酒があるので無理して下山する事にした。三国峠分岐までは良いルートのとり方だったがそれから先は急坂ストレートで無我無中で下った。途中より電池をつけたのでますます歩きにくく下山したと言うより山から落ちていったと言う感じであった。

赤谷川と渋沢の出合橋の上でテントを張ってビバークをした。

苗　　場　　山

大　槻　雅　弘

「苗場山は越後第一の高山なり、魚沼郡にあり登り二里といふ。絶頂に天然の苗田（なへた）あり、依て昔より山の名に呼なり。」と『北越雪譜』の鈴木牧之が約１８０年前に登って記している山名由来のとおり、頂の苗田は広く、「この絶頂は周一（めぐり）里といふ。」はそれ以上のものを感じた。

５０に手が届いたり、抜け出た者にとっては昨日の１４時間の行動をした体には、少なからず疲労と倦怠感を伴なっていた。でも、期待を裏切らなかった平標山の沢登りは、そのことも忘れさせ限られた休みを、目いっぱい行動しようと我々は苗場山を目指したのである。

この越後に足を向けたのは３年前、割引沢から巻機山以来、平ケ岳や谷川岳の沢を登り１等の山を登って来たのである。

吉田君、岡本君と３人で、年に１度は「いい沢・いい山のぼり」をしようと言って来たものが、今回で４回目のものとなったのである。

年々、メンバーが増えて今回は８名の予定が、急用で最終６名になった。

いつもながら吉田君のバイタリティーで、今回は林道ゲード係の人の車を借り、我々の車を２０㎞程先の下山口、赤湯温泉へ回送して苗場山を登ることとなった。その回送に、３時間弱を要したが山頂小屋で泊る予定なので、全員のんびりと、昨日のハードな行動とは裏腹にゆっくりリズムでスタートした。

冬なら、相当の賑わいをしているであろうリフト乗場を後に、１ピッチで和田小屋について昼食

を摂った。この、かぐらスキー場のリフトは相当上部まであり、神楽ケ峰の1,９００m近くまで伸びていた。夏場、歩いて登りヤレヤレと思ったら横にスキーリフト降り場があるのは、鈴木牧之の「案内は白衣に幣(へい)を捧げて先にすゝむ」時代に考えられただろうか。最終リフトからは一呼吸で神楽ケ峰であった。

神楽ケ峰△2,０２９.６mは標石がなく、基盤の十字が露出していた。周囲の地形を見ると、崩れ落ちそうな岩石で、恐らく雪溶け時期にどこかえいったのであろう。ここからガスの中に初めて苗場山が見えかくれして、姿を現した。

その頂へは一段道は落して、鞍部で水を汲み、そこから爪先上りとなって最後の登りとなった。ようよう頂に、一呼吸おいてと思っているうち、先行者の頂の声がした。やはり広い。山頂がだだ平い。今までに経験した事のない平な山頂に、一等三角点も座っていた。「バンザーイ」の声は、山小屋にいる人に異様に聞えたらしい。

小屋の前で、スキヤキをして乾杯する様は、他の登山者の小屋のドンブリ飯とみそ汁一ぱいよりは、はるかに豪華であった。夜、山小屋の主人は「小屋へ来て、受付もせずすぐ三角点でバンザイをする輩は、こらただ者じやないと思っていた」と言って、お互の酒がガラになるまで快談をした。そこで、「京交の坂井久光(きゆうこう)さんによろしく」と出た。やはり、我等の先輩、全国津々浦々名が知れ渡っているのに、いまさらながら頭が下った。

翌朝、５時出発は我々だけで、他の宿泊客はまだ皆眠っていた。今日は下って温泉だけ、そんな慌てなくてもいいが、京都まで帰るには遠い。池塘の間を進み、御来迎を見る。１ピッチ、１時間下った尾根道で朝食して、みずみずしい緑のブナの大木で囲まれたフクベ平で休憩した。一汗、二汗流した頃赤湯の宿に着いた。

身を切るような冷い流れ、峻嶮な山相の谷間にこのような温泉を、昔の人はどうして見つけたか不思議に思いながら湯につかる。少しほてった体に、なんとも言えない調和のとれた古い障子の宿で、乾いたノドをビールは気持良く通っていった。

９月には新館が建ち、いずれ旧館も建替ると聞いて、出来ることなら昔のまゝがいいと思いつつ、赤湯を後にした。

〔コースタイム〕（三橋）

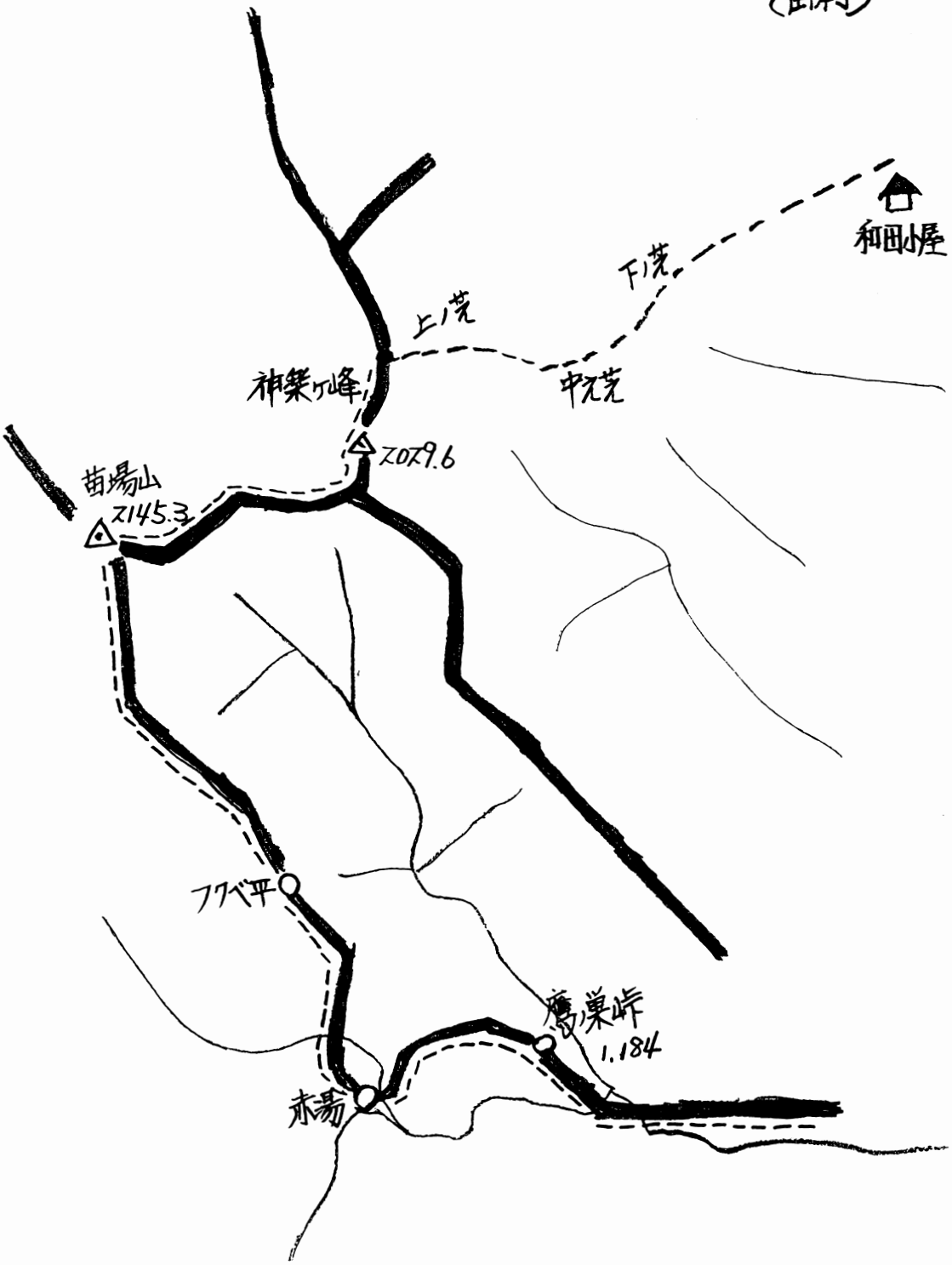
８月２３日　２１：０１京都東ＩＣ…２１：５６米原ＪＣ…２３：１５～２０女形谷ＰＡ（丸岡）…２３：５５金沢東…０：１０～１５小矢部ＳＡ…０：４０立山…１：１１親不知…２：３７長岡ＪＣ…２：５３～３：００越後川口ＳＡ…４：００月夜野ＩＣ（￥１１,３５０）…４：３２～５：１５川古温泉ゲート…５：３０大清水沢出会（車止・朝食）

８月２４日　６：１５車止…６：３６赤谷林道終点…６：４５～７：００金山沢…９：００クロガネ岩…１０：００２段３０mの滝…１５：１５源頭…１６：２０～３５平標山三等三角点…１７：００～３５平標小屋…１８：０５～０７分岐…１８：２０～２５大源太山…１８：４０～４５黒金山…２０：１５林道…２０：４５車止テント泊

８月２５日　５：００起床…７：０５出発…猿ケ京…Ｒ１７号…三俣…８：４５～９：２０ゲート

苗場山概念図

（田村）



…９：３０～１１：５５祓川（車回送）…１２：１５～１３：００和田小屋５合目（昼食）…１３：２５～３０　６合目…１３：５４下ノ芝…１４：０５～１５中ノ芝…１４：３４～４０上ノ芝…１５：１０～３５神楽ケ峰…１５：４５～１６：０２雷清水…１６：４０稜線…１６：５３苗場山一等三角点（遊泉閣泊）

８月２６日　５：００苗場山…５：２１下山口…６：００～４０朝食（1,８００m地点）…７：１０～２７フクベ平…７：４５水場…８：０５橋…８：１３峠…８：４５～９：３３赤湯温泉…１０：０８見返りの松…１０：２２～２６鷹ノ巣峠…１０：５３林道…１１：１５車止…１１：２２～３８水場…１２：０４二居大橋…１２：３１越後湯沢ＩＣ…１３：１５～５３越後川口ＳＡ（昼食）…１４：１１長岡ＪＣ…１４：５５上越市（米原まで３５５キロ）…１５：０７～１０名立谷浜ＳＡ…１６：１８立山…１７：００不動寺ＰＡ（金沢）…１８：０５九頭龍川…１８：５８～１９：０５賤ケ岳ＳＡ…１９：２５～４５神田ＰＡ（夕食）…草津付近渋滞…２０：５５京都東ＩＣ（￥１0,５００）

〔参加者〕吉田　武、大槻　雅弘、古市　昌造、岡本　義弘、田村　正弘、三橋　勉

比良・奥の深谷

平成２年７月２０日　　台川　敦美

京都から簡単に日帰りで行けるこの谷を溯行された方は多いでしょう、しかし流れに沿って谷筋を忠実に辿られた人は少ないと思いますのでリーダーによっては登らしてもらえるという事を報告します。

運の悪いことに当日は水量が増していて滝の上がゴルジュ帯を抜けられず高巻いて次の滝壷の手前へ１０m程の懸垂下降、ここだけが水から離れた部分で高巻きといっても歩いては進めない……つまり四輪駆動です、しかし一週間後には他の有力メンバーと組み再挑戦時には水位が低くて簡単に完登したとのことです……　リーダーは毎度お世話願ってる京都岳人クラブの広沢さんです。

谷の様子は私の独断と偏見を言うより案内書の文句を借りた方がわかりやすいので寸借して、この谷は別名１９の滝と呼ばれ美瀑と碧潭を連続させ、その響宴に酔いしれる。

比良随一の美渓とありましたが正にその通り目前に迫る美しい滝、そして滝壷、青々と繁る木立の間より射す陽光が水面に模様を描く、そして渓流の水音から水瀑の響き、刻一刻と変化する景色を楽しみつつ進む谷底は現世を離れた極楽の趣きを満喫させてくれました。

その美滝を眺め釜の淵の緑に腰を据えて一献傾けての趣きこれまたいいですね、しかし本日は次から次へと滝壷へドブーンドブーンの連続で……イーエ別に落ちたのではありませんリードする方がザイルを腰に急な流れの釜の中を泳いで行きます。ＯＫの合図があればセカンドも右えならえでドブーンと泳いで壁へ取り付きますが水が少し冷たかったのと久し振りの水泳で楽しむどころか服を着たままの上ザックを背に他の道具も体についてますし足元はフェルト足袋、溺れないように必死に蹠がきました。水泳の苦手な方は浮袋かエアーマット必携帯ですよ。

この奥の深谷と呼ばれる部分は距離的にそう長いコースではないが型の違う滝が連続で楽しみも

連続して襲ってきますから夢中で行動すると休みをとるのも忘れてます、やっと一本立てて煙を上げてるところえ完全武装の中年のアベックが下手より颯爽と登場、広沢さんの顔を見るなり「お魚取りですか？」には一瞬返事できません、マイッタナーとリーダーの顔を再度眺めてアッーナルホドと了解、水中眼鏡をかけてました（利用価値は他にあったのですが相手の方にはそれが分らないので）会話もそこそこで何を急いでるのか二人は装備を使う様子もなく「躊躇」することもなく立木の繁みに消えて行きます、アー残念なり楽しみがふえたと喜んだのも束の間でした（お手並拝見がパァーでした）。

案内書にも残置ハーケンの印は１ケ所だけで実際には３ケ所程ありましたが他は皆無でした。ですからリーダーは３回はピンを打ってましたし他は木の根っ子やキャメロットやナッツを使って支点を取り、何も取れずに登って行く部分も多くありました（皆さんにだけ内緒でお教しえします実はリーダーの指先には吸盤が付いてますよ）。

リーダーも何回かこの谷へ多くの人数で入ってるが当然巻き道利用でザイルを使い入るのは初めてとの事でしたがその割にコースをすぐ決めて行動します（つまりルートファインディングが上手なのです）し一度もバックしてません登りきってます、しかし見ていて無謀な行動はありません確実に階段を上るように登って行きます……、まあこれぐらいにしておきます限（き）りがありませんので。

セカンドの私が難儀したのは３ケ所ありました、どうにも動きがとれず相当時間を要（コヤ）した様です、しまいに腹が立ってきますが技量と力がない哀しさでどうにもなりませんがクリヤーした時は全身ズブ濡れの身体を振るわして大歓声が上ります。この興奮は皆さんにも楽しんで頂く価値ありと思い拙文を綴りました。

以　上

〔個人山行〕　西国巡礼シリーズⅠ

石山寺～岩間寺～上醍醐寺

山岡昭弘

７月２２日、曇り時々晴れ、今日は、西国３３ケ所観音霊場のうち、第１１番上醍醐寺、第１２番岩間寺、第１３番石山寺の各札所を巡ってみようと、西尾氏と２人で出かけた。

ＪＲ石山駅を８時２０分に出発。駅前を左へ瀬田川に向かって進み、瀬田川に添って石山寺へ向かうことにする。

石山寺山門前には９時前に到着。山門（東大門）の仁王様が迎えてくれていた。

石山寺を参拝後、次の岩間寺へ向かう。山門前の道を右へ進み、京滋バイパス石山ＩＣのそばを通って、中千町バス停へと進む。バス停を越えてすぐの十字路を右折し、岩間寺参道へと進んでいく。岩間寺までずっとアスファルト道が続いている。京滋バイパスの向こうに、岩間山山頂にある電波塔が見えていた。しばらく歩き、上千町バス停を過ぎると、だんだんと坂が急になってくる。湖南アルプスを眺めながら進んでいく。道の左手に延命水があり、喉を潤した後でもうひと歩き、岩間寺に到着したのは１０時４０分であった。

岩間寺を参拝後、境内を通り抜け、奥宮神社へと向かう。岩間山を巻くようにして、オオバコの

じゅうたんの上を進み、奥宮神社の見晴らし台に到着したのは１１時過ぎ、少し早いがここで昼食とした。見晴らし台からは京滋バイパス、石山団地、瀬田川などが良く見えていた。

奥宮神社からは、参道を駐車場まで下り、駐車場のはずれにある「上醍醐寺」への標識どうりに進んでいく。急な下り坂を下り、やがて林道と合流、左手に寺があり、やがて、内畑口からの道に合流する。ここは別所出と呼ばれている。ふり返ってみると、岩間山山頂の電波塔、奥宮神社の森が見えていた。

内畑口からの道に添って進み、平出の集落に入ってすぐに左折し、再び坂を上っていく。左手に清滝宮があり、先程別れた内畑口からの道に再び合流する。坂を登りきった所のＹ字路を左折し、５０ｍ程進むと、右手に山道があるので、その道を進む。道はやがて急な下り坂となり、送電線巡視路と交わりながら続いている。しばらく進むと、先程の内畑口からの道に再び合流した。そのまま道に添って進むと稲出の集落に入り、そして、笠取口から京都国際ゴルフ場へ向かう道と合流する。ゴルフ場の方向へ進むと黒出の集落に入り、左手に上醍醐寺登り口が見えてくる。

橋を渡って右折すると上醍醐寺登り口である。民家の前に竹で水が引いてあり、小さなコップが添えてある。喉を潤して出発、登山道を登り始める。醍醐寺からの表参道とは異なり、人はほとんど通らない。杉木立ちの中の道を進んでいく。

登り口から約２０分、１４時１７分頃、上醍醐寺開山堂へ到着した。

上醍醐寺境内を一巡、参拝後、醍醐水を水筒に詰め、参拝者で賑わう表参道をかけ降り本日の山行を終えた。

〔参加者〕西尾　直樹、山岡　昭弘

〔コースタイム〕

ＪＲ石山駅８：２０→石山寺８：５３～９：１０→京滋バイパスを越える９：２５→上千町バス停９：４７～９：５５→延命水１０：２２→岩間寺駐車場１０：３０→岩間寺１０：４０～１０：５３→奥宮神社１１：０９～１２：１５→奥宮神社駐車場１２：２８→別所出１２：４０→清滝宮１３：０２→稲出１３：１７→京都国際ゴルフ場への道路へ出る１３：３０→上醍醐寺登り口１３：４５～１３：５５→上醍醐寺開山堂１４：１７～１４：３０→上醍醐寺観音堂１５：００→醍醐水１５：２０→表参道途中の水場１５：３６→女人堂１５：５３→西大門１６：０５

夏の北海道の山旅

坂　井　久　光

７／１９　舞鶴よりフェリーで２１日小樽へ上陸。食後バスで余市へ。乗継いで美国へ。食料を買ってバスで積丹岳登山口へ。此所より約３㎞林道を歩いて山小屋へ。良い小屋だが湧水の水道が断水しており、ポリタンを持って２㎞下の貯水池の谷川へ水汲に行った。

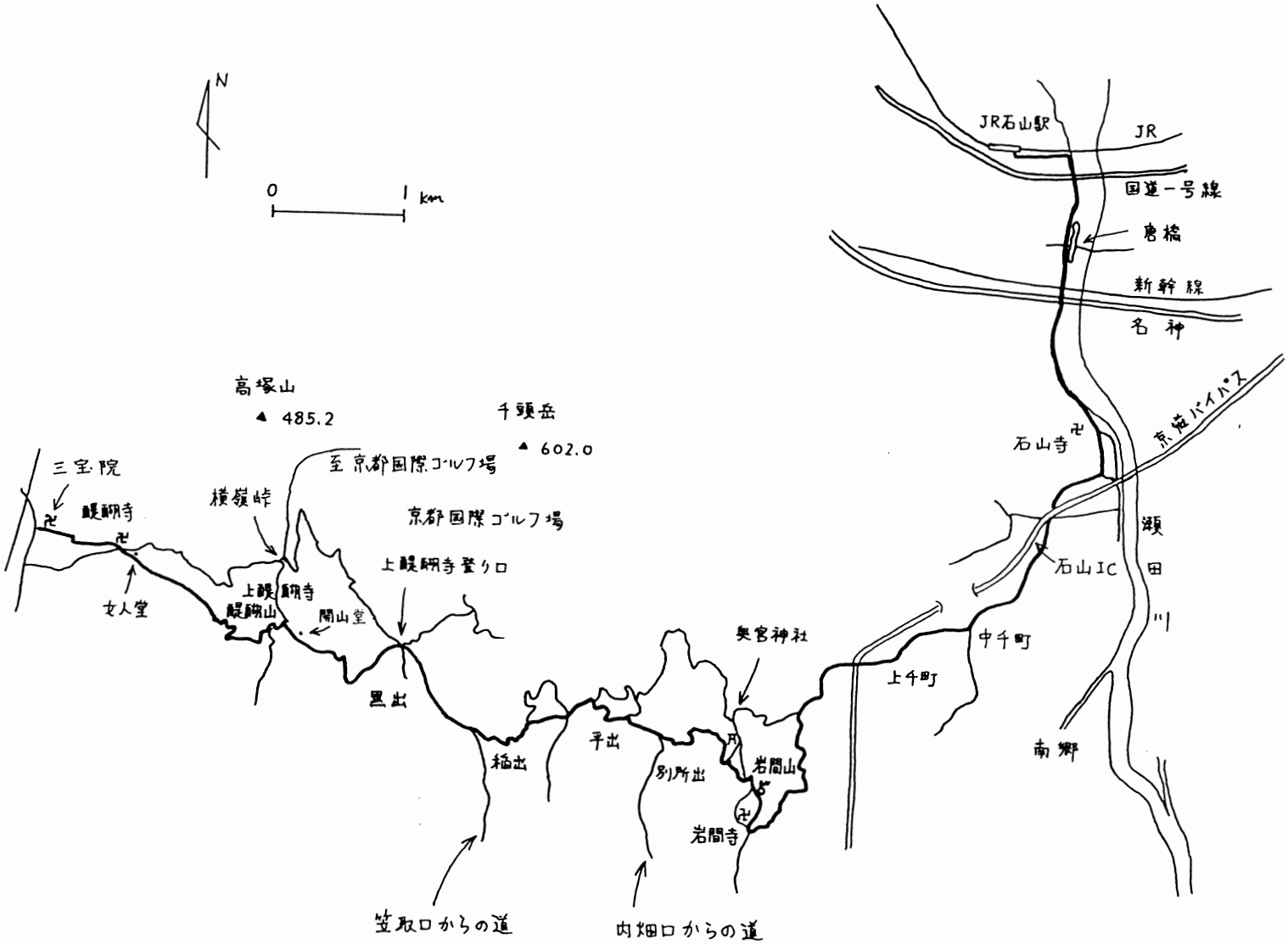
夕方、岐阜大卒の青年がバイクで到着。彼はニュージーランドで１年暮して山も登ったが、薮がなく牧草地から岩磯帯となるので気持の良い山が多く、何でも驚いたのは火口湖の張つめた氷が見る見る内に融けて蒸気が上り噴水爆発したのを湖畔で他の登山客と見た時、休火山が爆発した現場

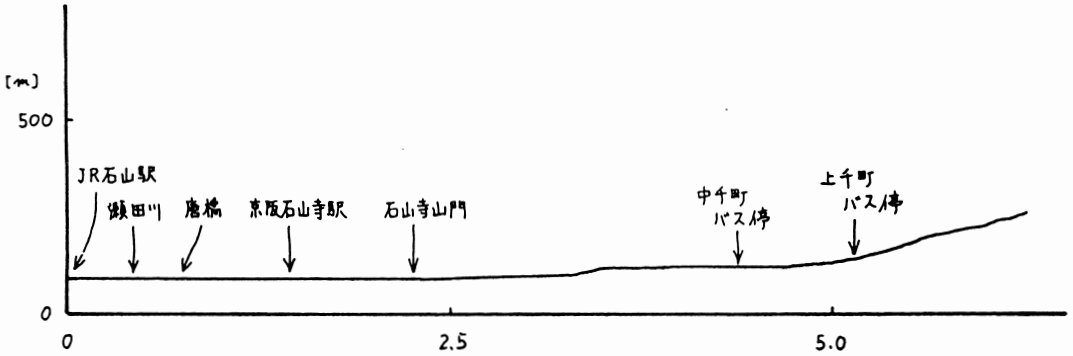
にいたのは全く幸運だったが怖しく駈下ったとか。夕食後早く就寝したが、涼しく翌２２日４時に起きたが雨で４：２０小雨となり晴を確心して出発。夏道は笹が茂っていたが最近八合目の稜線上迄刈られていて涼しく、歩き易かった。白樺林の緩い斜面を登切ると稜線に出て積丹岳が見えてくる。八合目以後は刈込がなく薮でかき分けて登頂。此所でお握りの朝食を食べたが一面のガスで目的の余別岳は元より１０ｍ先が見えず吹上げる風がすごく、その内又もひどい雨が降って来たので、今日は駄目と断念して小屋へ下山。

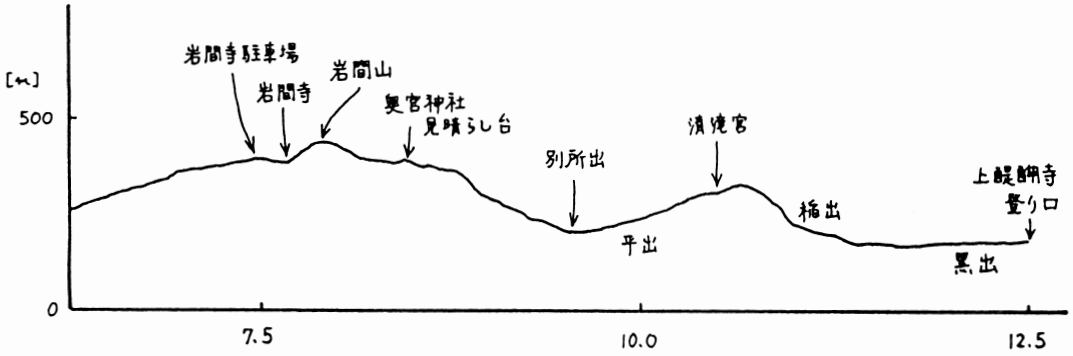
途中で青年と行き違った。小屋に戻り濡衣を干してコーヒーを沸して飲んでいるとジープで札幌から娘２人連の人が来て登って行ったが四合目迄行って薮がひどいと引返して来た。昼頃になってガスも晴れ陽が照る様になり青年も帰って来た。着物も大半干いたので下山して仁木の狩人の塩津さんへ。其処から然別の今春知合った郵便局を退職した丸谷さんに電話して彼を訪れた。彼は余市岳麓のヤマハの工事へ通っていたが辞めて今は鮎釣りに夢中とのこと。今迄の事を話すと明日山麓迄送ってやるから是非泊って行けとのことで、泊ったが、彼の家も我家同様夫婦丈で子供達は、三重やら東京へ出ているとのこと。父は山口の毛利藩士だったとか。夕食に彼の釣った天然鮎が３匹あって美味しく頂戴した。翌２３日赤井川の奥のヤマハの工事場迄送って頂き、そこから林道歩き、途中ヒッチして登山口へ。余市川沿いに行き、川を渡って支尾恨を登って朝里岳との鞍部に出て、急峻な尾根を直登して西峰に出て、匍松の切開を通って東峰△へ、弟切草・キリン草が咲いていた。天狗岳・手稲岳が見えたがガスで遠方は見えず、眼下にヤマハの工事現場が赤く地肌を現していた。小時休んで下山。工事現場のはずれ迄歩きやっとヒッチして赤井川バス停へ。１時間ばかり間があり運よくヒッチして余市へ。汽車で然別の友人宅へ戻り、厚く礼を述べ近くの酒屋からビールを頼んで別れ、小樽－札幌とＪＲで行き、急行利尻で翌２４日４：０３天塩中川へ。

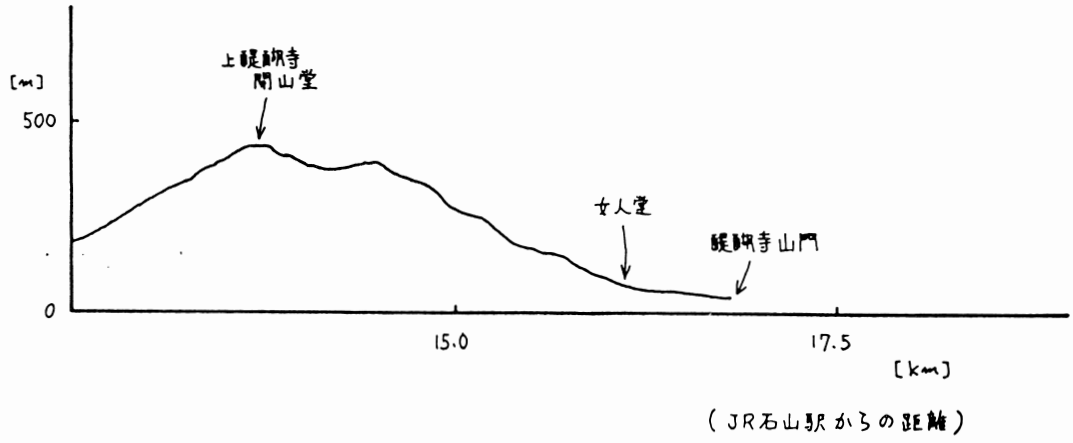
早過ぎて駅員もおらず、店も明かず仕方なく登山口を探して山麓へ。途中早朝散歩の人から採石場から右への林道を登れば良いと聞いて、牧場の丘口で朝食をとり、尾根筋へ向う道を探すがなく、やっとそれらしい道を辿ると熊糞が沢山あり、笛を吹いたり爆竹を鳴らして歩いた。尾根筋に出たが又下りになりぐるりと一周りして途中の谷間に戻り疲れて谷沿いに下って中川町へ。近くのぽんぴら温泉へ行って夜行の疲れを休め、再挙を計ろうと入浴後売店の人に訳を話していたら、ペンク山は道があり小学生も遠足で登っている。とのことで、車なら３０分位で山頂直下迄行けるとの話で、午後副長が車で案内してくれるとのことで、洗濯を干しておき昼食後再出発、北大演習林管理人の家に行き、林道のキーを借りたが、すぐ後車が燃料不足で車を案内するとのことで、一緒にパンケ山林道へ。下中川から入林して燃料車と途中別れて一路山上へ。一部悪いが大体乗用車も通れて林道で、道下で下車、山道を約８分程ハイ松の切開を登ると頂上へ。晴れたらオホーツク海も見えるとか、薄曇で余り遠望がきかない。３人三角点を眺め、私の話を聞いて感心していた、寒くなったので下山、車でぐるりと尾根道を走り、採石場の中川町登山口へ。今朝の反対側のチエンのかゝった林道が登口だったのだ。温泉に帰り厚く礼を述べ一泊し、翌日雨だったが名寄で一泊

ペンケは上、パンケは下の意である。雨で一日休養して２６日タクシーでピッシク山の登山口のロッジ迄行き長い林道を歩いていると現場へ行く車をヒッチして峰越林道との分岐（２㎞）迄行き、


N
0
1 km
JR石山駅
JR
国道一号線
唐橋
新幹線
名神
京滋バイパス
石山寺
瀬田川
石山IC
中千町
上千町
南郷
奥宮神社
岩間山
岩間寺
別所出
平出
稲出
黒出
上醍醐寺登り口
開山堂
上醍醐寺
醍醐山
醍醐寺
三宝院
女人堂
横嶺峠
至京都国際ゴルフ場
京都国際ゴルフ場
千頭岳
▲ 602.0
高塚山
▲ 485.2
笠取口からの道
内畑口からの道


[m]
500
0
JR石山駅
瀬田川
唐橋
京阪石山寺駅
石山寺山門
中千町
バス停
上千町
バス停
0
2.5
5.0


[m]
500
0
岩間寺駐車場
岩間寺
岩間山
奥宮神社
見晴らし台
別所出
平出
須佐宮
稲出
黒出
上醍醐寺
登り口
7.5
10.0
12.5


[m]
500
0
上醍醐寺
開山堂
女人堂
醍醐寺山門
15.0
17.5
[km]
(JR石山駅からの距離)

山頂近くの林道終点から匍松の切開を約２００ｍで山頂へ。曇で展望なく晴天なら３６０°の展望とか。ピは岩アレは有、シリは山の意、山腹に立派な山小屋も建っていた。その辺でヒッチして名寄へ。バスで西興部(ネコッペ)へ行き旅館で一泊。翌２７日町営バスで上藻迄。ウエンシク岳（悪い崖山）は山麓迄７㎞あり、歩いていると町の人の車が来て氷のトンネル迄ヒッチ。今年は暖冬で殆ど氷も少くなっていた。崖の急斜を５００ｍ登り尾根の東端に出ると３㎞の標柱。痩尾根の岩場が数ケ所あり要心して登る。コブも2,3あり仲々楽でない。一汗も二汗もかいて山頂へ。展望は宏大で、眼下に興部や滝の上町の集落がよく見え、オホーツク海や紋別・網走方面や、天塩山や大雪山群も遠望出来た。

下山は新設の中央登山路を下山、６㎞で林道へ、登山口迄４㎞。歩いてヒッチして、道々へ出て再ヒッチして滝の上町に行き鶴屋ホテルで一泊。主人は同年輩の町の有力者で明日登る狐山も昔は熊がいたが今はいない。

途中迄車で送るとのこと。翌２８日シエルトコツプ川の二又迄車で行き、廃屋の建つ林道を５㎞余り歩いた。途中北狐の子供が2,3匹出てすぐ隠れた。４㎞程奥で車で仕事に来た人に出合って話を聞き、終点より笹の茂る踏跡を辿り稜線へ、標識が次々あり小ピークを四つ程越えやっと山頂へ、さがしてやっと三角点を笹間に見付けた時は嬉しかった。白樺とトド松の林で展望は全くない。

帰路車の人に頼んでバス停の国道迄送って頂き謝礼した。バスで紋別乗換遠軽町へ。バスセンター前旅館で一泊。

翌２９日町営バスが日曜なので朝便なし。バスで瀬戸瀬駅に行きタクシーを呼んで瀬戸瀬温泉へ。荷を預け軽装で出発。林道登り終点から尾根筋の踏跡を登って1,6㎞、2.6㎞の標を見て遠軽営林署の小屋がある処に出たが、山頂はその後で踏跡を辿って登ったが、山頂一帯は全く平坦で、何処が頂上か三角点を見付けるのは大変で、途中から雨となり雨衣を着けたが汗でびっしょり、小１時間かゝり、樹の下に櫓の残骸を見付け、その周辺の笹や蕗の茂みを捜してやっと見付けた時は全く嬉しかった。雨でゆっくり出来ず、標識を頼りに下山したが下に林道が上っているのを見付け、それを下った。途中６㎞の標あり１時間余で車道へ。宮城団地、丸瀬南側でヒッチして瀬戸瀬温泉へ。館の支配人は親切で早速入浴して浴衣に着換へ、室で肌着をかへて着た物は洗濯した。

泉質は全くなめらかで良い温泉だった。翌３０日バスで遠軽に出て、北見の西相ノ内で下車。昼食後タクシーで山麓まで行き、仁頃山８２９ｍへ。約３㎞の車道を登って無線塔の建つ山頂へ。今も警察の無線塔を建設中だった。下山途中、ダンプをヒッチして西相ノ内へ。バスで北見温泉・温根湯の旅館を捜したが、皆満員で仕方なくバスで留辺蘂のユースホステルで一泊。翌３１日ヒッチして北見富士山麓の狐村ドライブインへ行き、ブル道を登り廃道近い山道を見付けて登ったが、山頂は２等△で櫓が立っていた。下山は山道を下ったが古い林道に出たが蕗が一面で、蕗を踏倒して長い廃道を下り、決治林道を下って国道に出て狐村へ。少憩後ヒッチして石北峠越えして旭川　深川に行き友人田中へ夕刻立寄った。田中は上口が心配しているので電話せよとのことで電話したら心配して小屋へ行き無事下山を知ったが、その後どうしているのか気になったらしい、又、清水理事長へも電話して心配かけたことを謝した。お客がおり自作のメロンを土産にくれ駅迄送ってくれた。

旅館で１泊。翌３１日富良野へ行き民家で一泊。８／１山部へ行きタクシーで登山口へ、芦別岳1,７２７ｍの岩山だ。4,5時間かゝるとのガイドだったが、良い道で、平面山迄２時間余、熊の地のコルへ下り雲峰山を経て２㎞の登り約１時間で山頂へ。山頂直下はお花畑で、高山植物が花盛り、山頂では三重の青年がいた。少時休んで往路下山、山部からバスで富良野の民家に帰り、ＪＲで旭川経由札幌へ。旭川は駅前の安宿で一泊。翌日３日札幌に出て友人を訪れたが夏休で会へず、大通公園でバタージャガを食べたり、中島公園でボートを漕いだり、夕は薄野の祭を見物して、札幌将棋クラブの女性４段と二局指して二局共勝って何段ですかと驚いていた、弟の道竜王とその後一局指して惜敗した。道岳連の佐々木委員長に電話したら明日から小樽の赤岩山で同山協の研修があり皆集るので来て下さいとのことで、翌４日赤岩山へ、本山の橋本さんと会って現場の岩場へ案内してくれた。約２０ｍの岩場で眼下に海を見下ろし展望絶佳。水瓜やメロン・氷の差入を有難く御馳走になり、山形・岩手・長野や道内各地から２０～３０人の岳人が集っていて私を紹介してくれた。小樽の上口も来ており、主催者で忙しくゆっくり話せなかったが、昼食や、夕刻天狗山で色々語り合った。佐々木さんは夕刻宿舎へ来られ話合った。

日山協本部の増毛・堀江両氏は仲々立派な岳人と見えた。皆と名残を惜んで、翌５日車でフェリーに送って頂き、敦賀へ６日夕刻上陸ＪＲで着京した。

常念岳から大天井岳より槍ガ岳へ

錦林　　竹村芳広

７月２４日　今回も烏丸の山本俊夫さんと二人の山行きとなった。

烏丸営業所を２４：００時出発、名神高速から中央自動車道を走り２５日６：３０分沢渡へ着く。ここまで来るのに途中約１時間仮眠しただけだ。上高地はマイカーが規制されて居るのでタクシーで上高地へ入る。７：３０分さすが夏休み人が多い観光客や登山者もかなり入る。身仕度を整えて、一路蝶ガ岳ヒュッテへ向かう。明神館を通り抜け、蝶ガ岳への登り口の徳沢園へ着く。９：４５分気を引き締めていよいよ登山だ。１０：００時

長塀尾根はいきなり急登で始まる。樹林の中の道で適当に風も出て来て急な登りも幾分楽だ。蝶ケ岳ヒュッテからの下山者と離合する、小さな子供を連れた家族づれだ。

残念ながら穂高連峰は雲に隠れて見えない、ジグザグ道が続くかなり長く急な登りだ。木々の丈が低くなり、三角点のある長塀山に出る。１３：１０分途中二パーティーを追い越す、かなりな年配の人も杖をつきながら登っていてかなりきつそう。長塀山からは、傾斜が緩んで樹木の中を登ると平坦な草原が現れる。ハイマツの中に開かれた道を進むと今日泊まる、蝶ケ岳ヒュッテに着く。１４：１０分

２６日　蝶ケ岳ヒュッテを６：３５分出発、殆どのパーティーが先に登り出した遅ればせながら出発。穏やかな尾根が蝶ケ岳まで続いている。岩屑の道を登り下りして横尾への分岐を通り、蝶ケ岳に着く。７：１０分視界は良くなくて穂高連峰は雲がかかっていて全景を見せてくれないのが残念だ。幾つかのピークを上下していよいよ常念岳への登りだ、槍ケ岳より見る常念とは違いかなり

険しい山だ。まず行動食を食べ気を引き締めての登りだ。幾つかのパーティーを追い越し、急な登りを山本氏はもくもくと登っている。一本立てようと様子を伺ううちに大きな岩の積み重なった常念岳2,８５７mに着く。１１：１５分

約１時間で一気に登り切る。頂上には展望盤に祠がある。やや急な道を一気に常念乗越しに下る。広い鞍部に赤い屋根の常念小屋に着く。小屋で挽き立てのコーヒーを頼み腹ごしらえをする。常念の乗越広場から樹林帯に入ると徐々に傾斜は強まる。視界が開け岩稜の道となる。横道岳はその名の通り、頂上へは出ずに中腹を巻いて行く。東天井岳への直上コースを分け、指導標通りに東天井岳の西側に回り込み大天井岳へ向かう。常念山脈の最高峰だけにじわじわと登りが続く、やっと大天井岳下にある大天荘につく。１４：１０分　今日も早いが明日の天気を楽しみにここで一泊する。

２７日　大天荘から槍へは３回目となる。今日は快晴で表銀座縦走路が楽しみだ。大天井ヒュッテを過ぎ喜作新道へ出ると、ごつごつした北釜尾根が正面に見える。また左の方には、これから行く東釜尾根に槍の雄姿も見える。西岳の山腹をトラバースしてヒュッテ西岳へ着く。９：２０分　これから東釜尾根に入る水俣乗越への下りはかなり降ろす。やっと最低鞍部の水俣乗越に着く、東釜尾根への登りはハシゴや鎖を頼りに登って行く。幾つかのピークを越えてヒュッテ大槍に着く。槍への最後の登り、かなり険しい登りだ山本氏は楽々と登って行く、僕も遅れないように着いて行く。約４５分で槍ケ岳山荘に着く。１２：３８分　ここでラーメンを頼み腹ごしらえだ。槍のピークを見ると、かなりの人が登っている。６回目の槍のピークへ目指して登り始めるが、渋滞してなかなか上へ登れない。前には大学のパーティーが待っている。普通なら３０分でピークに立つのが５０分もかかってやっとピークに立つ。１３：４５分　数十人がたむろしているて、人を掻き分けて祠の前に行き山本氏と代わる代わる記念撮影をして早々に槍の肩の小屋へ下る。

今日は殺生ヒュッテへくだり泊まることにした。１４：３０分

２８日　６：２０分　殺生ヒュッテを出る槍に別れを告げて一路上高地へ向かう。途中横尾ではすごい人でまるで京極を歩いて要るようだ、さすが夏休みだ。　以　上

〔参加事〕鳥丸　　山本　俊夫、錦林　　竹村　芳広

なぜ山に登るか

紹介　「探検の時代」（梅棹忠夫著作集第１巻）

荒　田　又之助

６００ページ近くのものであるが、内容は「白頭山」（満州と朝鮮の国境）、「屋久島」、南洋（パラオ、トラック、ポナペ、クサイ、ヤルート）の探検など楽しいもので、なかには「イヌぞりの研究」というのまである。

「なぜ山に登るか」「そこには山があるからだ」というのは、大変ウイットのある答えであるが、論理的説得力を欠くという。（「なぜ探検をするか」）

×　　×　　×

「登山ブームとマッハ族」

「死をかけてまで山へゆこうとする、ひじょうな冒険をあえておこなってまで、なぜ登山家たちは山へゆくのでしょうか。（ここでマッハ族のことに触れ）

マッハ族は、山のぼりにくらべると、にている点もあり、ちがうところもあります。わたしもわかいころから山にのぼってきた人間ですが、現代の山のぼりは、わたしどものころの登山にくらべると途方もないことになってきているようにおもいます。わたしどもは、一見しただけで、のぼれる岩とのぼれない岩とをみわけたものです。このごろは、とてものぼれないような岩でも、のぼっています。穂高にも、谷川岳にも、気がとおくなるような岩があります。数百メートルにわたる大岩壁にとりついて、三日も四日もかけてのぼるのです。

むかしは山も岩もすべて足でのぼったものです。いまは岩は手でのぼるもののようです。腕力にものをいわせてのぼるのです。ときにはザイルを歯にくわえて、顎の力でのぼるようです。

登山用具もずいぶんかわってきています。ザイル、ピトン、カラビナ、アブミ、うめこみボルトなど、さまざまな特殊登攀用具が発達しています。特殊鋼と合成繊維のひじょうな発達が、登山用具の革命をもたらしたようです。これらの道具をつかって、オーバーハングの岩でもかんたんにのりこえてしまうようです。最近は、このような極限的な岩のぼりのことを、スーパー・アルピニズムなどとよんでいるようです。

こういう傾向は戦前からありました。アルピニズモ・アクロバーティコ、すなわち、曲芸登山とでもいうべきものでしょうか。この系統が今日のスーパー・アルピニズムにつながっているようです。ヨーロッパでも日本でも、おなじ現象が進行してきたようです。

「安価なヒロイズム」

なぜ現代はこんな冒険がはやるのでしょうか。

近代アルピニズムの歴史というのは、ごくあたらしい現象です。なぜ山へのぼるかということは、経験のないひとにはなかなか理解しにくいもののようです。くるしいおもいをして山にのぼっても、一文の得にもならない。そんな無益なことをなぜやるのか、とふしぎがられます。山へのぼる動機について、一般市民のあいだには、英雄説とでもいうべきかんがえかたが、まえから根づよくあります。山にのぼるのは、頂上にたったときに、ちょっとした英雄の気もちがあじわえるからだろうというのです。むかしから山に興味をもたない高級知識人たちは、登山を「安価なヒロイズムにすぎない」というきまり文句でかたづけるのがつねでした。先日も、あるテレビの番組が登山をテーマにとりあげていました。しかし、その題名が、「この瞬間、私は英雄になる」というのです。解説者は、完全にこの英雄説の解釈にしたがっていました。登山家は、頂上にたった瞬間に、自分を石原裕次郎と同一化するのだ、というのです。

わたしは、この説はナンセンスだと思います。英雄になるためには、だれかみていてくれているひとが必要でしょう。他人の存在が条件になるのです。ところが登山は、原則として、観衆のいないスポーツなのです。自分ひとりの心のなかのよろこびをもとめて、人びとは山へゆくのです。だれかに英雄視してもらうために山へゆくのではありません。これは、マッハ族たちのスピードマニアのたのしみとも共通しているのですが、これらの冒険のよろこびは、基本的に、人間関係的なも

のではないのです。

これはひそやかな、個人のよろこびなのです。山のぼりもだれもみていないところでおこなわれるのです。現代人の孤独な魂の、心のふかいところに、そのよろこびが存在するのです。「英雄説」はこのような心のふかいところにまでたちいって、解釈できるような説ではありません。英雄説というのは、ひと時代まえにおこなわれた、きわめて皮相な俗見にすぎないとおもいます。登山のことをまったく理解していないことばです。

「冒険の変貌」

現代では、登山もなくなりません。マッハ族もなくなりません。これらは、いかにも現代の冒険とみる見かたもなりたちますが、わたしはちょっと疑問を感じているのです。ほんとうに現代はそのような冒険にみちた時代なのでしょうか。

どうも、むかしのひとや、局外者が感じるほど、これらの行為は冒険ではないのかもしれません。山のぼりにしても、ひとつには、道具や技術がひじょうに進歩して、案外、安全なのかもしれません。むかしの山岳旅行といえば、靴もなければ、ろくなザイルもない。病気になっても、抗生物質もない。地図もなかった。そういう時代の山あるきのほうが、現代の岩のぼりよりもはるかに冒険的であった、ということもできます。探検家の消耗率は現代よりはるかにたかく、まさにアドベンチャーであったのです。

谷川岳の岩にとりついていても、横あいから、未開の現地人がおそいかかってくることはありません。岩壁も、無限につづいているものではなく、ゴールはみえているのです。そういうことをかんがえると、こんなものは冒険のうちにはいりません。むしろ現代は、冒険のない時代、冒険がなくなった時代かもしれません。

むかしは社会的なアドベンチャーがたくさんありました。わかものたちは、人生における冒険をもとめて旅にでたのでした。人生航路における冒険は、しばしば社会的地位の上昇を可能ならしめるものでした。未知の土地の発見は、そのまま富の獲得を意味することもありました。それらのものをもとめて、人びとはあえて冒険をこころみたのです。ヨーロッパ人による世界の海洋の制覇も、アメリカの西部開拓も、そのようなアドベンチャラーたちによって達成されたものです。

日本にもそういう時代、つまり冒険の時代がありました。一五、六世紀の戦国時代がそれでしょう。その時代は、冒険的エネルギーがわきたっていた時代です。アドベンチャーの時代です。わかものたちは、危険をおかしてでも、チャンスをもとめて、かけまわりました。

戦国につぐ冒険時代は、明治時代でしょう。いわゆる海外雄飛をめざして、たくさんの青年たちがのりだしていきました。大正から昭和にかけても、大陸や南洋には、チャンスをもとめる冒険家たちが、どこにもたくさんうごめいていたものでした。

「フロンティーアの消失」

フロンティーアの存在する時代こそは、アドベンチャーの時代です。しかし、いまはちがいます。いまはフロンティーアをうしなった時代です。せまい国土に一億がつめこまれて、おたがいにとなりを気にしながらくらしていかなければならない時代です。肩をすりあわせて、窒息するようなお

もいで、秩序をまもりながらいきていかなければならない時代です。いまは、いまは、冒険の火がきえかかっている時代なのです。

冒険は、基本的には、窒息状況からの脱出の努力でしょう。ところがいまや、社会には窒息からの脱出をゆるすだけのフロンティーアがないのです。アドベンチャラーたちは、現代ではフロンティーアをむりやりに開拓しなければならないのです。

これはちょっと、現代のジャーナリズムのおかれている状況に似ているかもしれません。現代のジャーナリズムは、ときにはむりやりの企画をたて、ブームを演出する。ジャーナリズム自体も、ある意味では窒息状態においこまれているのです。報道にあたいするような劇的な事件はなにもおこらない。なんでもない事件も、報道のためには、劇的なものに仕たてあげていかなければならないのでしょう。

登山も、現代では、きわめて窮屈なものになっています。山にのぼって、そのすがすがしい冷気を胸いっぱいにすいこむ、というようなことではなくなっているのです。岩壁のしたの雪渓には、はやくいかないとテントをはる余地がなくなるのです。岩をのぼっていると、すぐとなりのリッジで、べつの隊がハーケンをうちこんでいる音がきこえるのです。冬の氷壁登山でも、ひと冬にいくつものパーティーがはいりますので、はやくいかなければルートをべつのパーティーにとられるのです。

いっぽうでは、極端な記録主義があらわれてきています。岩壁のちょっとしたヴァリエーションも、いちいち記録として登録されるのです。成功したら、さっそくにそのルートと記録をガリ版にすって、その近所にテントをはっている他の登山者たちにくばるのだ、ということもきいています。

「あたらしいフロンティーア」

現代では登山さえも冒険ではなくなっているのです。現代では登山さえもビジネスになりつつあるのです。登山家の主力も、学生から社会人へ変化しつつあるのです。学生は暇がありますから、ゆっくり山にのぼりますが、社会人は、時間の制約のために、いそいで山にのぼらなければなりません。

わたしはそのことを非難しているのではありません。現代では、アドベンチャーはこうなるほかはなかったのです。アドベンチャーをやりたいという人間の精神的欲求は、すべての創造の源です。しかし、アドベンチャーが時代に適合していたのはむかしのことです。アドベンチャーの心というのは、現代では、保持するのがむつかしくなってきているのです。アドベンチャーをこころみる場がないのです。現代の岩のぼりなどは、そういう状況のなかで、むりやりにつくりだされた、擬似フロンティーアにおける、擬似アドベンチャーなのかもしれません。

登山をなんにもならないことといってはいけません。そういうことをいえるのは、フロンティーアがいっぱいあった時代のひとです。現代では、もはや、フロンティーアはありません。登山は、現代というフロンティーアが消滅した時代における、青年たちのエネルギーと冒険的精神とがつくりだした、現代のあたらしいフロンティーアなのです。それ自体はなんの利益もうまないかもしれませんが、それはそれで意味のあることです。価値のあることです。その意味では、これも、芸術

のようなものかもしれません。なんの利益もうまなくても、そこには人間のよろこびがあります。青年たちは、なんの利益にもならないことに、自分自身をかけることをしっているのです。かれらは、未来に対して自分をかけることの価値をしっているのです。

冒険的登山家とマッハ族とのあいだには、共通するところもありますが、ちがっている点もあります。精神的なカタルシスがおこるという点では、おなじでしょうが、登山のほうがいっそう計画的、組織的な側面をもっています。まして相手は自然です。自然を相手の、全身全霊をうちこんでの対決です。そこには創造のよろこびがあります。

登山はたしかに、なんの利益もうまない、むだな行為かもしれません。そこにはしかし、フロンティーアをうしなった現代の青年たちの、潜在的なエネルギーがこめられています。それ自体がきわめて人間的な情念の発露なのです。現代という時代のひとつの側面として、それは正当に理解し、評価すべきものと、わたしはかんがえています。（「現代の冒険」）

× × ×

私、また日曜日がつぶれる職場に変わって、山行きにこの頃参加できておりませんが、大槻さんに挑発されて、「愛宕山1時間登頂」に挑戦しているところです。

例会報告

例会No.	目的地	月日	天候	担当者	参加者	記事
1802	丹後の海と海水浴	8月18日～20日		奥村　弘信		中止しました。
1803	平標山、仙ノ倉山苗場山	8月23日～26日		吉田　武	大槻　雅弘 古市　昌造 岡本　義弘	別稿詳報 田村　正弘 三橋　勉

部員動静

目的地	月日	天候	参加者	記事
比良 奥の深谷	7月20日		台川　敦美 （他1名）	別稿詳報
西国巡礼 シリーズ1 石山寺〜岩間寺 〜上醍醐寺	7月22日	曇り 時々 晴れ	西尾　直樹	別稿詳報
夏の北海道の 山旅	7月19日 〜 8月　6日		坂井　久光	別稿詳報
常念岳〜 槍ケ岳	7月24日 〜28日		竹村　芳広 山本　俊夫	別稿詳報
比良 ヘク谷	8月19日		岡田、三橋 大槻雅、 近藤明、 田村	小女郎池へ出る谷。初心者向けの谷で、シャワークライミングを楽しんだ。JACとの登山。
御岳山	8月25日 〜26日	快晴	広瀬、井戸 大塚、岩野 馬淵、近藤	田の原と濁河の両方から登り、山頂で交歓した。 （他2名）
日本百名山 高妻山	8月25日 〜26日		坂井　久光	戸隠連峰の山。5時間のコースを3時間で登った。　（次号報告）
鈴鹿 鎌ケ岳	8月25日		岡田　茂久 （家族）	ファミリー登山。
西国巡礼 シリーズ2 （きぬがさ）山	8月26日	晴れ	山岡　昭弘	次号報告
釈迦岳→ ヤクモケ原	8月26日	晴	鷲見寿末子	とびうめ国体の近畿予選会が比良であると聞いて同じコースを歩いた。 〔コースタイム〕北小松8：00→8：47涼峠→9：15ヤケ山9：22→10：27ヤケオ山→10：58△釈迦岳（1,060.6）11：15→1　30カラ岳→11：50比良ロッジ→12：00ヤクモ原12：30→13：50大山口→14：11イン谷口→14：35比良駅

目的地	月日	天候	参加者	記事
中央アルプス	9月 3日 ～ 4日		坂井 久光	中央線倉本駅から風雨の中を山小屋にたどり付いた。翌日もガスの中、南駒へ登った。
比良	9月 9日		横井、奥村 （他4名）	ネンリンピックの顔合せ。 打見山から金糞峠まで縦走し、イン谷へ下山した。
南比良縦走	9月 9日	晴れ	西尾 直樹 松田 誠二 山岡 昭弘	次号報告

雑報

✽ 9月の集会

9月10日（月）場所　厚生会館4F大教室

出席者　（本局）古市、方山、大槻雅、井上、山岡、岡田、和田、三橋

（市役所）西尾　（梅津）吉田　（高速）大倉　（OB）横井、坂井　以上13名

内　容　例会報告、個人山行、例会予定、その他

✽ 他山岳会の会報（受贈分）

8月号　青嶺

9月号　山友、京都山岳、愛宕ニュース、一等三角点、北山、近畿山行、木雞、趣味の登山、比良山岳

✽ 京都岳連遭対事業（冬山遭難を無くす集い）について

日　程　　平成2年12月2日PM3.－より

場　所　　京都府中小企業会館F8（西大路五条下ル）

講　演　　湯浅　道男氏、斉藤　惇生氏

㊟ 登山用品専門店会より

PM1：00より展示、即売会を行います。

平成２年10月１日

京都市中京区壬生坊城町４８

京都市交通局内

京交山岳部

SINCE 1980

THE LOG CABIN CO.

H.HASEGAWA'S SHOP

FOR ALPINISTS

KYOTO JAPAN

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品

贈答品総合センター

厚生会指定

サンコークラフト

西　島　輝　雄

左・川端丸太町下る下堤町８８
TEL（075）771－3442

帆　布・濾　布
テント・シート
雨　合　羽

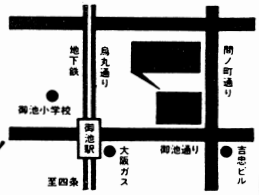
木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL　801－5331（代）
西大路営業所
下京区西大路七条下ル
TEL　321－0251

登山とアウトドア専門店

今、アウトドア派大集合!!

●登山用品はもちろん、
注目のスポーツ
カヌーをはじめ、
ひと味違う充実の
品揃えは必見のもの!!



ビッグ ホリイケ

営業時間　AM10:00～PM9:00〈年中無休〉
京都市中京区御池通高倉西入（千代田生命京都御池ビル2F）
☎(075)222-0363

●技術とサービスの創る！印刷

株式会社
北斗プリント社

タイプ・写植オフセット印刷●電子写真印刷

〒606 京都市左京区下鴨高木町38-2（バス停前）
TEL(075)791－6125(代)
FAX(075)791－7290

建設省国土地理院発行地図販売特約代理店
国土地理院空中写真（カラー・白黒）取次
通産省地質調査所発行各種地質図取扱店
各種地図製作並びに印刷
地形図は、20万・5万・2万5千とも全国を常備しております。

株式会社 **小林地図専門店**

〒600 京都市下京区不明門（あけず）通六条下る西側
（烏丸通六条東 1筋目下る）　☎（075）351－6598(代)

地下鉄：五条駅　5番出口・市バス：烏丸六条下車